

コロナが露わにしたアフリカの「脆弱性」

別府正二郎

NHKヨハネスブルク支局長

全土でロックダウンが続く南アフリカでは、

貧困層の生活が困窮し、略奪も起きている。

五月から経済活動の一部再開へ踏み出したが、

世界の格差はそのままアフリカに映される。

「なぜアフリカで感染者が出ていないのか？ 熱帯の気候

だからか？」。今から思えばずいぶんの外れな疑問だが、

実際に二月二八日にナイジェリアで、サハラ砂漠以南のア

フリカで初めてとなる新型コロナウイルスの感染者が確認

されたと発表されるまで、アフリカはあたかもこのウイル

スとは無縁であるかのようにだった。しかも、ナイジェリア

やセネガルなどで次々に初めての感染者が確認されても、

フランス人やイタリア人だったり、ヨーロッパ帰りの人

だったりしたため、「コロナは海外旅行ができる白人の病

気だ」と話す人までいた。

しかし、状況はすぐに変わった。確かに最初はヨーロッ

パとつながりがある人たちが持ち込んだものだったが、今

べつが、しょういちろう 一九七〇年大阪生まれ。京都大学卒、フランス国立社会科学高等研究院卒業、九四年NHK入局。カイロ支局、アメリカ総局、ドバイ支局を経て現職。新聞協会賞、国連特派員協会金賞、ボーン・上田記念国際記者賞などを受賞。著書に『終わらない戦争・イラク戦争後の中東』など。

ではローカルな規模で感染が広がっていて、世界保健機関（WHO）のまとめでは、五月一日までに、アフリカ大陸で合わせて七万五〇〇〇人以上が感染し、二五〇〇人以上が亡くなった。しかも、WHOは「最悪、一九万人が死亡する」としていて、感染の広がりが懸念されている。

南アフリカのロックダウン

このうち、アフリカ最大の工業国で多くの日本企業も進出する南アフリカでは、三月五日にイタリアへのスキー旅行から帰国した人の感染が確認されたのを最初に広がり、五月一日までに一万二〇〇〇人を超え、アフリカ大陸で最も多くなっている。三月二七日からは全土でのロックダ

ウンが続いていて、生活必需品の買い物や医療機関の受診などを除いて外出は制限されているほか、国境も封鎖されている。社会の安定のためだとして酒の販売も禁じられるなど、他の国と比べても厳しい措置が取られている。

私は、ロックダウンが始まり旅客便が停止する前に日本に退避するかどうか検討したが、結局、残留することにし、南アフリカに文字通り「閉じ込められた」。ただ、報道関係者は、医療や治安関係者などとともに外出制限の適用除外となっていて、なるべく短時間に屋外で行うなどの対応を取りながら取材が続いている。南アフリカをもつてしてアフリカ全体の状況を代表させることはとうていできないものの、それでも、アフリカの他の国とも共通する現象や課題が見えてきた。

「脆弱」とはどういうことか？

その最たるものが、WHOの記者会見などでも頻繁に語られる“vulnerable”という特徴だ。一般的に「脆弱な」とか「もろい」と訳されている。

まずは、社会インフラの脆弱さがある。中部の町クワクワは、二年前から水道が止まっていて、家々の庭には蛇口があるが、ひねっても水が出ない。干ばつの影響もあるが、

南アフリカの社会病理ともいえる汚職、つまり、架空の受注や工事費用の横領などで水道事業が破綻してしまったという。取材中、突然人々が家の中から大声を出しながらバケツを両手に持って路上に飛び出して一目散に走りだした。何事かと思つて、走って追いかけていくと、給水車がいた。この地区に給水車が来るのは数週間ぶりだということと、あつという間に順番待ちの列ができた。人々は「政府はしっかり手を洗うように言うけれども、そもそも水がない」と訴えた。国連の統計では、南アフリカの都市人口の半分に当たる一八〇〇万人が、自宅で手を洗うことができない。

医療体制も脆弱だ。都会の富裕層向けの私立病院はあるが、国民の半数近い貧困層にとっては地元の公立の診療所が頼りだ。しかし、北部のリンポポ州では、保健省の職員の男性が「消毒液も足りない中、どうやってウイルスと闘うたらいのか。そもそも、人々のウイルスに対する知識も足りない」と嘆いた。「人工呼吸器はあるのか？」と尋ねると、男性は「それは何のことか？ 正直、聞いたことがない。自分自身も知識が足りないということだな」と自嘲気味に語った。世界銀行の統計では、一人当たりの医療費は、日本は四〇〇〇ドルを超えているが、サハラ砂漠以南

のアフリカではおよそ八〇ドルだ。

「生きるために出歩かざるを得ない」

感染対策の徹底も難しい。経済的に貧しい黒人が多く暮らすタウンシップでは大勢の人が外出を続けている。いや、むしろ、外出を続けざるを得ない状況だ。ロックダウン開始後の三月三〇日は、公的年金の支給日に当たり、ヨハネスブルク近郊のソウエト地区でも、受け取りのために人々が長蛇の列を作った。ソーシャル・デイスタンスは全くできていなかった。ある男性は、「人混みを避けるべきなのはもちろんわかつている。しかし、食べ物を買うためには年金を貰わないわけにはいかない」と話した。スーパーでは、店内に一度に入る客の人数を制限しているため、外に順番待ちの長い列ができていく。それもそのはずだ。所得の低い人はまとめ買いができず、その日食べる分だけの買い物を得ないからだ。四〇歳のロレーン・マシティさんは、夫と五人の子どもの七人家族だ。勤めていた清掃会社からは雇い止めにあい、外出制限の適用除外になっている警備員の夫の収入だけになった。スーパーで買ってきたものを見せてもらったら、わずかな肉のほかは、保存がきく豆やビスケットだけだった。頻繁に停電が起きて冷蔵

庫がたびたび停まるため、生鮮食品を保存できないという事情もある。住んでいる家は、日本の六畳間ほどの一部屋だけで、そこで家族七人がじっと身動きもせず過ごすのは不可能だ。

縮む経済、悪化する治安

経済情勢は悪化している。世界銀行は、資源輸出が減り、海外からの投資や送金それに観光客も減るなどして、サハラ砂漠以南のアフリカの経済成長率は、昨年二〇一九年の二・四％から、今年はマイナス二・一％からマイナス五・一％へと大幅に低下し、二五年ぶりの景気後退になるとの見通しを示した。南アフリカに至っては六・九％以上の落ち込みが予測されている。

タウンシップでは治安の悪化も進んでいる。四月五日、ケープタウン近郊のタウンシップでは、シヨッピンゲンターの中にある酒の販売店で略奪事件が起きた。目撃者が撮影した映像では、数十人の群衆が大声を上げて閉店していた店になだれ込み、酒瓶の入った箱などを次々に持ち出す様子を捉えていた。略奪は散発的に起きていて、その後の一週間でケープタウンの周辺だけで一六件になった。支援食料の配給の遅れに不満を高めた若者が治安部隊に投石

し、治安部隊がゴム弾を撃ち込むような衝突も起きている。さらに衝撃的なのが、各地で学校が破壊されていることだ。休校になっている学校からパソコンなどの機材を盗んだ後に、証拠を消すためと見られているが、校舎に火を放つ悪質な事件が相次ぎ、政府は四月一三日、それまでに一八三の学校が被害にあったと発表した。

南アフリカ政府は、ロックダウンで感染増加のピークを後ろに数ヵ月ずらすことができているとして、その時間を利用して、医療や隔離、それに検査態勢の強化を進めている。その一方で、ロックダウンによる国民の生活や社会への負担が大きすぎるとして、五月一日から制限が部分的に緩和され、経済活動が一部再開された。その理由について、ラマポーザ大統領は国民向けの演説で、「ロックダウンは感染症対策としては有効だ。しかし、国民は食べていく必要がある」と述べた。外出制限や国境の閉鎖は続いているが、鉱山や一部の製造業が稼働し始めた。

しかし、こうした部分的な緩和は、感染者と死者ともに増えている中で行われている。同じように、ガーナやナイジェリアでも緩和の動きが出ている。感染者数が減るのを待つて緩和に乗り出すヨーロッパの先進国と同じようにはいかず、途上国で対策を徹底することの難しさが浮き彫り

になっている。

コロナ後のアフリカは、世界は？

ここ数年、国によって差異はあっても、経済成長が続けてきたアフリカは、急増する人口を追い風に「地球最後の巨大市場」として注目されてきた。しかし、新型コロナウイルスは少なくとも短期的には大きなダメージをもたらすことになる。アフリカで経済成長が停滞すれば、世界全体の貧困問題の解消にとっても足かせになる。

しかも、ウイルスの広がりによって経済格差はいつそう広がる恐れがある。南アフリカは、世界銀行の統計で、すでに世界で最も格差の大きい不平等な社会だ。白人を中心とする富裕層が暮らし、外出制限が徹底されている郊外の住宅街と、日々出歩かざるを得ない経済的に貧しい黒人が密集するタウンシップ。車で三〇分も移動すれば、二つの対照的な国の姿が見えてくる。しかし、これは豊かな先進国と脆弱な途上国という、世界規模の格差を凝縮した姿だとも言える。感染症に打ち勝つためには、強い者は脆弱な者を支えながらともに闘っていくしかなく、強い国は脆弱な国を支援しながら地球規模で対応していかねばならないことを示している。●